

令和2年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）  
研究経過報告書

国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究

令和3年2月

研究代表者  
菊地かおり  
筑波大学人間系

共同研究者  
窪田眞二  
常葉大学初等教育高度実践研究科

江幡知佳  
筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程

# 目次

調査研究課題の概要	1
1. 序章	2
1-1. 研究目的	2
1-2. 先行研究の検討	2
1-2-1. 海外の IB 認定校における IB 履修生／IB 修了生の進路選択過程	2
1-2-2. 日本の IB 認定校における IB 履修生／IB 修了生の進路選択過程	3
1-3. 研究課題と研究方法	5
2. 国際バカロレア修了生（大学生）調査	6
2-1. 調査の概要	6
2-2. インタビュー調査の結果	9
2-2-1. IB 修了生は、なぜ、海外の／日本の大学への進学を希望するに至ったのか	9
2-2-2. 海外の／日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何か	16
3. 終章	19
3-1. 研究成果	19
3-2. 今後の課題	20
引用参考文献	21
資料（アンケート調査単純集計、インタビューガイド等）	22
【巻末資料 1：国際バカロレア修了生（大学生）対象アンケート調査単純集計】	22
【巻末資料 2：国際バカロレア修了生（大学生）対象インタビューガイド】	27
【巻末資料 3：国際バカロレア履修生（高校生）対象インタビューガイド】	29
【巻末資料 4：国際バカロレア認定校進路指導担当教員対象インタビューガイド】	31
謝辞	33

## 調査研究課題の概要

### 助成事業：

令和2年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）

### 研究期間：

令和2年4月～令和3年6月（予定）

### 研究課題名：

国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究

### 研究課題名（英語表記）：

University admission support for students in the International Baccalaureate (IB) programme

### 研究代表者：

菊地かおり（筑波大学人間系）

### 共同研究者：

窪田眞二（常葉大学初等教育高度実践研究科）

江幡知佳（筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程）

## 1. 序章

### 1-1. 研究目的

本研究の目的は、国際バカロレア（International Baccalaureate、以下IB）を履修している高校生（以下、IB履修生）に対する望ましい進学支援の在り方を検討することである。

2010年代以降、日本においては、教育をグローバル化に対応させるため<sup>1</sup>、国際バカロレア（IB）の普及・拡大が図られてきた。IBとは、全人的な発達や高等教育への準備、国際理解等を重視する後期中等教育プログラムであり<sup>2</sup>、そのプログラムの履修・修了により、生徒は世界の約2,000の大学が認証する<sup>3</sup>IB修了証（IB Diploma）を取得できる。2013年当時、文部科学省大臣官房国際課長の永山は、IB認定校<sup>4</sup>を増加させる3つの理由として、①世界で活躍する人材育成、②人材流動性の向上、および③高校カリキュラムへの波及効果を挙げ、特に②人材流動性の向上に関して、インバウンドの効果、つまり海外からの学生の獲得と、アウトバウンドの効果、つまり高校生の海外への送り出しが期待されるとした（永山2013）。

だが、このIBの普及・拡大に対する期待は、必ずしも果たされるわけではない。当然のことではあるが、例えば日本人が海外でIB修了証を取得したとしても、「帰国生」として日本の大学に進学するとは限らず、また、日本でIB修了証を取得した生徒がみな、海外大学に進学するとは限らないからである。事実、結論を一部先取りするかたちになるが、筆者らが実施した調査結果に基づけば、海外でIB修了証を取得したもののなかには、後期中等教育課程在学中に、進路希望を日本の大学から海外の大学に変更したものが存在し（逆もまた存在する）、かつ、日本でIB修了証を取得したもののなかには、進路希望を海外の大学から日本の大学に変更したものが存在している。

こうした進路希望の変更はなぜ生じているのだろうか。その変更の背後には、海外の／日本の大学への進学に伴う、何らかの困難があるのではないか。もしあるならば、その困難を減らすための支援とは、いかなるものか。

これらの疑問に応える先行研究は、管見の限り乏しい。節を改めて、先行研究の検討を行う。

### 1-2. 先行研究の検討

本節では、（1）海外のIB認定校出身のIB修了生、（2）日本のIB認定校出身のIB修了生の進路選択過程に関する先行研究を整理する。

#### 1-2-1. 海外のIB認定校におけるIB履修生／IB修了生の進路選択過程

海外のIB認定校におけるIB履修生／IB修了生の進路選択を扱った先行研究として、岩崎による「在学生調査」（岩崎2007a）と「大学との接続調査」（岩崎2007b）が挙げられる。

「在学生調査」では、アムステルダム国際学校、デュッセルドルフ国際学校、パリ国際

---

<sup>1</sup> 例えば、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」（2013年6月閣議決定）において、「グローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成」のために、「一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す」と述べられた。

<sup>2</sup> 本稿では記述の煩雑さを回避するために、「IB」の語を用いて、IBディプロマプログラム（IB Diploma Programme）を指すこととする。なお、IBのカリキュラムの詳細等については岩崎（2018）を参照されたい。

<sup>3</sup> International Baccalaureate. “Developing a recognition policy” (<https://www.ibo.org/university-admission/benefits-to-universities-and-colleges-of-accepting-ib-students/developing-a-recognition-policy/>, 2021.1.20.)

<sup>4</sup> IBプログラムの実施を、IB機構（IB本部）より認可された学校を指す。

学校の在學生と卒業生を対象として、質問紙調査および面接調査が実施され、進路との関連で以下のことが言及されている。質問紙回答者 56 名中、日本の大学進学者は 44 名、外国の大学進学者は 12 名であり、外国の大学進学者の多くは、幼少期アメリカやフランスの現地校に通ったもので、実学・技術向上目的の進学（工学、フルート、バレエなど）が多い。国立大学を志望する者の特徴は、父親、もしくは両親が国立大学出身者ということにある。進路選択は、教員の進路指導（パリ）、現地の塾（デュッセルドルフ、アムステルダム）や先輩、保護者からの情報に依拠している（岩崎 2007a）。

「大学との接続調査」の内容と、調査結果に基づく IB 修了生の進路に関する言及は以下のとおりである。「大学との接続調査」では、①IB 科目のうち第一言語で日本語クラスをもっている国際学校（IB 認定校）を対象に実施された質問紙調査と面談聴取、ならびに、②当該国際学校の日本語教諭から IB を理解していると認識されていた慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）、国際基督教大学、およびユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）卒業生の受け入れ実績をもつ京都大学法学部・経済学部のいずれかに在学中の IB 修了生を対象にした、自由記述式の質問紙調査が実施された。調査結果として、例えばパリ国際学校において、日本人生徒の多くは進学先として日本の大学を選択することが明らかにされた。なぜなら、保護者の多くが、卒業後日本の企業で働くためには、日本の大学に入学することが必要との意識をもつためである。パリ国際学校やミュンヘン国際学校において、日本人生徒は日本の国立大学ではなく私立大学を選択する傾向にある。その理由は、私立大学は転学部などが可能でカリキュラムが柔軟、選択科目が多い、対して国立大学は、施設が古くカリキュラムの柔軟性に欠ける、帰国子女入試者に転部が認められないといった認識をもたれているからである（岩崎 2007b）。また、調査結果から、日本の大学の教育内容に対して「その教育内容の劣悪な評判」という表現を用いながらも、「過去の消化と未来に向けた充電」のために日本の大学への進学を選択した IB 修了生の存在も確認できる（岩崎 2007b: 114）。

### 1-2-2. 日本の IB 認定校における IB 履修生／IB 修了生の進路選択過程

日本の IB 認定校<sup>5</sup>における IB 履修生の進路選択（IB 認定校への進学理由および卒業後の大学選択の理由）を扱った先行研究として、渋谷（2016）による研究がある。渋谷によると、IB 履修生は、(1)英語圏の大学への進学を希望するから、(2)海外の大学への進学を希望するわけではないが、（高校において）英語で教育を受けることを希望するから、(3)「従来型の学び」ではなく IB の教育が好きだから、以上 3 つの理由のいずれかに基づき、IB の履修を選択する。そして、大学への進路選択に際しては、海外の大学を希望する場合に大きな経済的障壁が立ちだかること、および、治安や人種差別、学生文化の違い等から海外の大学への進学を敬遠する家庭があることが指摘されている。加えて、日本の大学を希望する場合、「IB を活用した特別入試」のみならず、AO 入試や推薦入試等、多様な特別入試を IB 履修生が利用していることが示されている（渋谷 2016）。渋谷による研究は、「IB に先進的に取り組む日本の学校での聞き取り調査を踏まえて、IB をめぐる高大接続について、当事者達の経験や考えを明らか」（渋谷 2016: 43）にすることを試みており、本研究にとって重要な先行研究に位置づくと言える。

だが、これまでの高校教育研究において重要視されてきた、進路選択を過程としてみる視点（例えば、総合学科を対象とした三戸（2001）が試みたような視点）を参考にすると、新たに見えてくる IB 履修生／修了生の進路選択過程の内実があるように思われる。渋谷は、「現に、進学先を国内か国外か決めかねている生徒は複数いたし、最終的に進学先を変更した生徒もいた」（渋谷 2016: 429）と述べているが、その変更の背後にはいかなる

<sup>5</sup> 本稿で日本の IB 認定校とは、学校教育法第 1 条に規定されている学校であり、かつ IB 機構（IB 本部）から認定されている学校を指す。

要因があるのかを問うということである。本研究は、パネル調査の方法を採用できるわけではないが、IB 履修生に加えて、進路選択を終えた IB 修了生に高校時代（場合によっては、それ以前も含む）を振り返ってもらうことにより、より通時的に、進路選択過程を描くことを試みる。

参考になる知見として、小林（2019）の研究を参照すると、英語圏の大学への進学を希望して IB の履修を選択したとしても、最終的に英語圏の大学への進学という行動に至るとは限らないことが示唆される。小林によると、日本人の高校生が卒業後の進路として海外の大学への進学を検討する際には、①そもそも海外の大学が進路希望の選択肢に入るかどうかという分岐点があり、②その後進学先の候補について要求される語学力や成績水準、費用等を踏まえて比較検討し、③最終的に出願先を決定して留学が現実的になる、という過程をたどる。そして、最初の分岐点で海外の大学への進学を希望したとしても、最終的に海外の大学への進学が現実のものになるとは限らない。

このような進路希望の変更はなぜ起こるのか。この点に関する知見は乏しいが<sup>6</sup>、小林（2019: 25）は、「高校生活の前半時点で海外の大学を志望しながらも最終的には国内の大学へと進学した層は（中略）海外で学位を取得するために長期間日本を不在にする長期留学よりも、日本国内の大学に進学した後に語学研修や交換留学等の制度を利用して短期留学を実践することにより、『グローバルな文化資本』と『ローカルな文化資本』の両方を獲得する」という合理性を求めているのではないかと、ということ仮説的に提示している。

同様の指摘、すなわち日本の大学において 1 年程度の留学をバックアップする体制が整備されていることが、海外の大学への進学を阻害する要因になっているという指摘は、他の研究でもされている（高崎 2013）。つまり、海外の大学への進学が実現するまでの過程に内包される障害（語学力、費用等）や日本の大学のグローバル化を背景要因として、日本の大学へ進学し、そのうえで海外経験をしようという進路希望を生徒が抱く傾向が強まっている可能性がある。

他方、日本の大学に進学する場合にも、進路選択の過程が単純であるとは限らない。IB 履修生が日本の大学に進学する場合には、上記のとおり(1)「国際バカロレア特別入試」等の名称で実施されている、IB 修了生のみを対象とした入試、あるいは(2)AO 入試や推薦入試という経路を経る場合が大半である。日本の IB 認定校を IB 履修生が卒業する場合に彼らは IB 修了証に加えて日本の高校卒業資格を取得するため、(3)一般入試の経路も論理的には考えられる。しかし「IB とセンター試験とはまったく異質で、両立は内容的にも時期的にもほぼ不可能」（渋谷 2016: 47）であるゆえに、IB 修了生による一般入試を経た進学という行動は現実的にはほとんど確認されないと考えてよいだろう。すなわち IB 修了生は、一般入試ではなく特別入試を受験することになるわけであるが、特別入試と一口に言っても、「入試の多様化」（リクルート 2009）という言葉に象徴されるように、実施方法や実施時期は各大学によって大きく異なる。各大学、学部・学科によって多様な入試が実施されているなかで、日本の大学に進学を希望する IB 修了生は、いかなる過程で進路を選択しているのだろうか。

総括すると、IB 履修生／IB 修了生の進路選択を過程としてみた場合には、（海外大学）進学支援制度や入試制度、それらを踏まえた教員による進路指導、そして IB カリキュラムと IB 履修生／IB 修了生の内的な世界とが、複雑に絡みあっているはずである。にもかかわらず、上記のとおりその過程を解明する研究は十分に行われてきたとは言い難い。

---

<sup>6</sup> この点に関して、小林は、「SES（Socio-economic Status：社会経済的地位）や学力といった独立変数は、留学希望者が進路を変更した要因ではないと言える」（小林 2019: 24、丸括弧内は引用者による補足）と述べている。

### 1-3. 研究課題と研究方法

前節の先行研究の検討を踏まえて、以下のとおり、研究課題を設定する。

研究課題 1：IB 履修生／IB 修了生は、①なぜ、海外の／日本の大学への進学を希望するに至ったのか、②海外の／日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何かを明らかにする。

研究方法：IB 履修生／IB 修了生を対象として、進路選択の過程に関するアンケート調査およびインタビュー調査をオンラインで実施する。アンケート調査は Google Form、インタビュー調査は Zoom を用いる。

研究課題 2：日本の IB 認定校では、いかなる進路指導が行われているのかを明らかにする。

研究方法：日本の IB 認定校の進路指導担当教員へのインタビュー調査をオンラインで実施する。インタビュー調査は Zoom を用いる。

研究課題 3：海外の／日本の大学へ進学することは、IB 修了生にいかなる学習成果をもたらすのかを明らかにする。

研究方法：IB 認定校を卒業後に海外の／日本の大学に進学した IB 修了生を対象としてインタビュー調査をオンラインで実施する。インタビュー調査は Zoom を用いる。

研究課題 3 について補足する。IB に関する日本の先行研究を参照すると、IB を通じていかなる能力やスキルが育まれるかについては一部論じられているものの、IB 修了生は、IB を通じて育まれた能力やスキルを大学進学後にいかに伸ばしているかという点に関しては、知見の蓄積が乏しい。例えば、岩崎は、「IB を受講することで、獲得される資質・能力は、非常に高度」であり、IB を通じて「課題設定、問題解決、文章化、プレゼンテーション能力が培われ、複眼的思考が訓練される。さらに英語で課題をこなすため、英語の専門用語を覚えることになる」（岩崎 2018: 317）と述べている。では、それらの「資質・能力」は、海外の／日本の大学教育において、あるいは、さまざまな学問分野（専攻）において、一様に伸ばされるものか。こうした疑問に対して知見を提供することは、IB 履修生／IB 修了生の進学を考えるうえで重要であると考え、研究課題 3 を設定した。

次章以降では、調査結果を分析しながら、各研究課題を検討していく。なお、2021 年 2 月末日時点においては、研究課題 1 に対応するデータの収集と分析が終了している。2021 年 3 月以降、研究課題 2 および 3 に対応するデータ収集ならびに分析に取り組む計画である。

## 2. 国際バカロレア修了生（大学生）調査

### 2-1. 調査の概要

本章では、研究課題 1 について検討する（再掲）。

研究課題 1：IB 履修生／IB 修了生は、①なぜ、海外の／日本の大学への進学を希望するに至ったのか、②海外の／日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何か。

手法として、(1)サンプリングのためのアンケート調査、加えてその後、(2)半構造化インタビューを実施した<sup>7</sup>。そのような手順を踏むこととした理由は、以下による。本稿の考察の対象となる IB 修了生の進路選択の過程を類型化すると、以下の図 1 に示すように 8 つのパターンが見られるはずであり、各パターンへの布置に基づき、インタビュー対象者を選定することが必要と考えたためである。

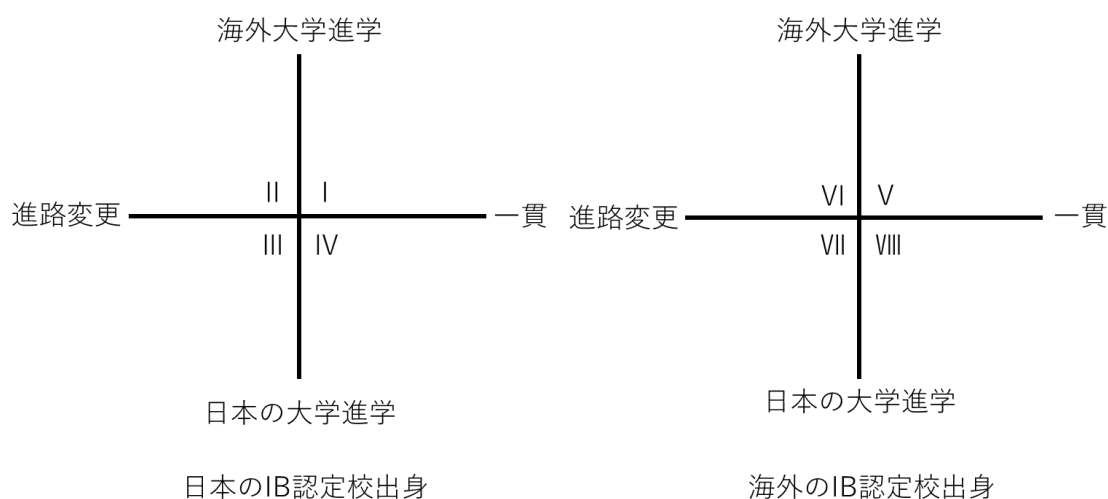


図 1 本研究における IB 修了生の進路選択過程のパターン

出典：筆者作成

アンケート調査の概要を述べる。出身の IB 認定校が海外か日本か<sup>8</sup>、現在海外の大学に在学しているか、日本の大学に在学しているか、後期中等教育課程在学中に一貫して海外の／日本の大学への進学を希望していたか、進路希望の変更があったか等を、オンラインアンケートフォーム（Google Form）を用いて IB 修了生にたずねた。結果として、38 件の回答を得られた（単純集計の結果は、巻末資料 1 を参照）。回答の布置は図 2 のとおりである（なお、番号は回答された順を、番号の上の取り消し線はインタビュー調査への協力が不可であることを指す）<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> このような方法は、混合研究法の説明的デザイン：参加者選定モデルと呼ばれる（クラスウェル・プラノクラーク 2010）。

<sup>8</sup> 海外の IB 認定校には「海外のインターナショナルスクール」と「海外の現地校」が、日本の IB 認定校には「日本の高校（公立）」、「日本の高校（私立）」、および「日本国内のインターナショナルスクール」が含まれる。

<sup>9</sup> 回答⑳の IB 修了生は、「あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか」という問いに対して、「高校入学時は何も考えていなかった」と回答し



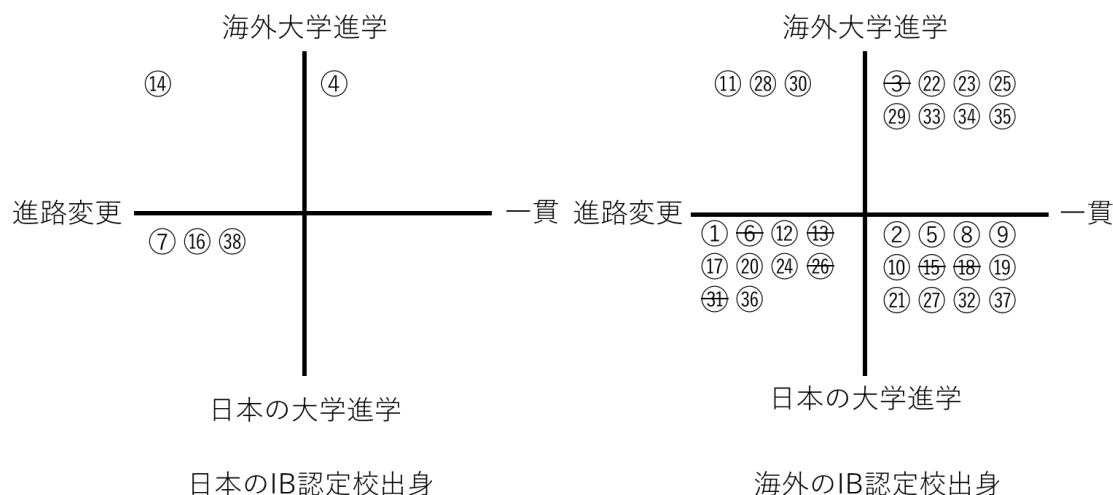


図2 アンケート調査への回答に基づくIB修了生の進路選択過程の布置

出典：筆者作成

アンケート回答者38名のうち、インタビュー調査への協力意志があったとしたのは31名であった。当該31名のうち、図2を参照しながら、以下の観点でインタビュー調査への協力を依頼した。すなわち、進路希望の変更を経験したとする13名の回答者（象限Ⅱ、Ⅲ、Ⅵ、Ⅶに布置）については、海外の／日本の大学への進学をめぐる何らかの困難を経験した可能性が高いものとして、全員に対し、協力を依頼した。加えて、比較対象として、象限Ⅰに布置する回答者1名、象限Ⅴに布置する回答者のうちの4名、象限Ⅷに布置する回答者のうちの4名に協力を依頼した。

結果として、20名から実際にインタビュー調査への協力を得られた。インタビューのプロフィールは、表1のとおりである。

表1 「IB修了生進路調査」対象者のプロフィール

表記	付置象限	出身校 (IB認定校)	所属大学	所属する学部学科	学年	調査日
G1さん	Ⅰ	日本の高校 (私立)	海外の大学 (米国)	リベラル アーツ	2	2020/11/11
G2さん	Ⅱ	日本の高校 (私立)	海外の大学 (米国)	リベラル アーツ	3	2020/11/12
G3さん	Ⅲ	日本の高校 (公立)	日本の大学 (私立)	法	2	2020/11/13
G4さん		日本の高校 (公立)	日本の大学 (私立)	環境情報	1	2020/11/13
G5さん		日本のインター ナショナル スクール	日本の大学 (国立)	医	3	2020/11/17

たが、一貫した進路希望を抱いていたと本人が認識していないという点で、「一貫」でなく「進路変更」に分類した。

G6 さん	V	海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (英国)	工	1	2020/12/9
G7 さん		海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (オランダ)	コンピューター科学	2	2020/12/15
G8 さん		海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (トルコ)	医	3	2020/12/16
G9 さん		海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (カナダ)	リベラル アーツ	2	2020/12/24
G10 さん	VI	海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (米国)	未定	1	2020/12/2
G11 さん		海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (英国)	経営	1	2020/12/3
G12 さん		海外のインターナショナルスクール	海外の大学 (英国)	数	3	2020/12/16
G13 さん	VII	海外の現地校	日本の大学 (私立)	商	4	2020/11/18
G14 さん		海外の現地校	日本の大学 (私立)	リベラル アーツ	3	2020/11/20
G15 さん		海外のインターナショナルスクール	日本の大学 (国立)	経済	1	2020/11/24
G16 さん		海外のインターナショナルスクール	日本の大学 (私立)	リベラル アーツ	2	2020/11/25
G17 さん		海外のインターナショナルスクール	日本の大学 (国立)	法	1	2020/11/26
G18 さん	VIII	海外のインターナショナルスクール	日本の大学 (国立)	数	4	2020/12/9
G19 さん		海外のインターナショナルスクール	日本の大学 (国立)	社会	4	2020/12/23
G20 さん		海外のインターナショナルスクール	日本の大学 (私立)	国際政治 経済	3	2020/12/23

出典：筆者作成

インタビュー調査の概要は以下のとおりである。インタビュー調査は2020年11月～12月にかけて、オンライン（Zoom）で実施した。1人当たりの時間は1時間程度とした。中

心的な質問項目として、これまでの学校歴、IBの履修を選択した理由、進路選択の経緯について（志望大学をどのように決定したか、進路選択へのIBの学習の影響、進路選択の際に感じた困難とそれをどのように乗り越えたのか、高校での進路指導や保護者とのやり取り）、進路選択を振り返ってよかったことや後悔していること等を用意した。対象者の許可を得たうえで、インタビューの内容は全て録音、文字化した。

## 2-2. インタビュー調査の結果

以下、インタビュー調査の結果を述べる。なお、本報告書においては、できるだけIB修了生の声をそのまま、掲載することとした。

### 2-2-1. IB修了生は、なぜ、海外の／日本の大学への進学を希望するに至ったのか

IB修了生は、なぜ、海外の／日本の大学への進学を希望するに至ったのか。本項では、a) 一貫して海外の大学を希望していた場合、b) 進路希望を日本の大学から海外の大学に変更した場合、c) 一貫して日本の大学を希望していた場合、d) 進路希望を海外の大学から日本の大学に変更した場合に分けて、インタビューの語りを紹介する。引用の際、個人情報の特定につながる恐れのある箇所は、【 】を付し調整を加えている。

#### a) 一貫して海外の大学を希望

はじめに、一貫して海外の大学を希望していたIB修了生の語りを引用する。

- ・ [米国の大学在学中] 「大学4年間で何が本当に学べるのかなとか、私の周りで大学に行って、遊んでいる人が多かったんです。だからそこに疑問を感じているところがあつたっていうのは、正直、一番大きいんですけど。でも、いろいろ考えてくと、タイとかベトナムとか、いろいろな所で、ボランティアを経験させていただいて、いろいろな国の人と話していくって自分の考えにすごく影響されるし、正直楽しくなるっていうか、こういう視点もあるんだとか、そういうことに気付いて。いろいろな人と出会えたほうがいいな、いろいろな自分にはない考えを持っている人たちと多く接したほうがきっといいだろうなっていうのがあつて。留学生とか、アメリカの大学すごく多くて、私の大学も2割留学生だったりして、アメリカの大学って比較的いろいろな、人種とかも考えたり、あと、親の経済面とかも考えて、トータルで可否を判定しているところがあるので、そういう環境に飛び込んでいったほうが、自分的には、将来的にはプラスかなと思ったのがあつて。私は田舎でずっと育ってきたので、都会の大学は難しいと思うところがあつて。私の小中高全部小さいんで、人数が少ないので、総合大学よりは、小規模大学がいいと思って、留学生の割合、大学の規模、ロケーションなどを考えて、今の大学になつたっていうのがあります。」 (G1さん)
- ・ [英国の大学在学中] 「もともと海外に住んでいたんで日本の大学は最初から考えてなかつたんで。海外重視として、お姉ちゃんがイギリスのスコットランドの大学に行っていたのでイギリスでもいいかなみたいな感じで考えたりして。アメリカはIBプラスでSAT<sup>10</sup>とか取らなくちゃいけないんです。それが大変だったっていうのもあつて。あと12年生の夏に、ブラウンユニバーシティにサマースクールみたいので行ったんですけど、アメリカ、ちょっと怖いっていうのがあつて。アメリカ怖いと思ってアメリカよりはまだ、学校から行くんだしたら大半がアメリカ、もしくはイギリスなんです。だからアメリカじゃなかつたからイギリスかな。(中略) IBで日本、受けるのって海外を受けるより大変なんです。」 (G6さん)

---

<sup>10</sup> 非営利法人であるカレッジボードが主催する標準テストを指す。

- ・ [オランダの大学在学中] 「やっぱり、ヨーロッパに行きたいなってなって。ドイツがもちろん候補に挙がって、でもドイツ語しゃべれないしなっていうので、周辺の諸国で英語でできるコースっていうの考えると、オランダの今いる大学とか他の大学とかが、英語でやるコースがあったんで、そういう所をメインに応募しました。」 (G7さん)
- ・ [トルコの大学在学中] 「大学を見据えたときに、父がすごく愛国心の強い人で。いわゆる、セミリンガルになってほしくないみたいな願望がすごく強い人なんです。なので、トルコの文化も言葉もしっかりとできるようになってほしいってことで、できればトルコの大学には将来通ってほしいっていうのを、ずっと小さい頃から言われてたんですね。(中略)最終的にトルコを選択した大きな理由としては、英語で学べるんですね、トルコの医学部って。英語で学べるっていうことを踏まえると、やっぱりIBで培った知識も使えるっていうのも大きかったし。あと、自分の言語的に日本の医学部に進学した場合、恐らく、トルコでは医者にはなれないだろうなっていうふうに思ったんですね。トルコで医学部卒業した場合だと、割と日本では外国の医学部を卒業した医師にも寛容なんです。試験は受けさせてくれるっていうのが基本的なシステムで。だから、僕が仮にトルコの医学部卒業しても日本に帰ってきて医師国家試験を受けることは可能なんです。なので、トルコの学校を卒業した場合、自分は恐らく二つの国で医師免許を取得できるだろうなと思いました。」 (G8さん)
- ・ [カナダの大学に在学中] 「例えば、最初に候補に上がったのがアメリカとかカナダとかオーストラリアで。イギリスだとイギリスに行く方は、Aレベルと同じように(専門分野が)決まっている方のほうが多かったんでそれはなしで。アメリカ、カナダかオーストラリアってなったときに、日本以外の方が良かったので。英語を使いたかったんで。アメリカだと、一応受けたんですけど学費が高めだし、政治的に混乱してたかなっていうのもあって。オーストラリアも最後まで悩んでいたんですけど、カナダだとフランス語も使える。フランス語もずっと習っていたので、専攻もアーツ・アンド・サイエンス、両方できる学部があったのでここが一番いいかなって。」 (G9さん)

上記の語りから、一貫して海外の大学を希望していた理由として、日本の大学の学習環境への疑問、多様性の重視 (G1さん)、兄弟姉妹の影響、日本の大学の受験手続きの煩雑さ (G6さん)、外国 (ドイツ) に住んでいた経験 (G7さん)、親の影響 (G8さん)、英語で学びたい (G9さん) といったことが挙げられる。そもそも、「一貫して海外の大学を希望していた」という点で、上記の5名は括られるが、その所属している大学の所在は、米国、英国、オランダ、トルコ、カナダと多様である。それぞれの国の選択理由としては、上記の理由の他に、学費の問題と、言語の問題が挙げられる。すなわち、学費の点で、米国の大学は敬遠される傾向にある。加えて、英語プログラムを備えているオランダとトルコの大学がそれぞれ、進学先として選択される事例が確認された。

#### **b) 進路希望を日本の大学から海外の大学に変更**

次に、進路希望を日本の大学から海外の大学に変更したIB修了生4名の語りを引用する。

- ・ [米国の大学に在学中] 「オープンキャンパス。でも、そのとき行って、全然しっくりこなかったんです。自分が【日本のX大学】にいて、何ができる、何を学ぶのかなって考えたときに、結局、大学に進むまで、あまり理系の研究をしたくなかったのかもしれないっていうのに気付いて。で、高2の夏休みに、エイチラボというサマーキ

キャンプがあったんですけど。エイチラボっていうのは、アメリカの大学とか、海外大学の大学生のメンターがいて、それで大学の雰囲気とかを、いろいろ聞く中で、そっちの自由だったりとか、いろいろリベラルアーツ教育ですよ。いろんな学科、同時に学べたりする環境に、ある種の憧れを持って、アメリカの大学も意識するようになり。」 (G2 さん)

- [米国の大学に在学中] 「まず、そもそも海外の大学っていうのを受けるイメージがないっていうか、受けていいものなんだっていうのを知らなかったところですかね。そういう人って、今、なんで日本の大学、行きたいのって。友達にもそのとき当時、聞いていたら、別にそもそも海外って選択肢がないんだとか、多分そういう状況だと。一応、物理的には可能だけど、それって日本人がすることじゃないよねみたいな感じに思っていたからなのかと思います。(中略)もうここで海外(UWC)来たら、もう海外、行くしかないだろうっていう勢いはありましたね。ここで日本、帰ってきたら、何のために行ったのみたいな。(中略)で、考えたんですけど、イギリスとアメリカっていうの、まずそこで考えて。有名な大学ってイギリスとアメリカにあるなってなって。ただ、僕、やりたいことが決まらなかったんで、イギリスはないなというふうに思って。アメリカの、見たんですけど、どうもこれ、アメリカの中で(中略)リベラルアーツやるんだったら、リベラル・アーツ・カレッジがいいっていうんで、リベラルアーツ系の学校に結構、少人数の授業が多いようなところを選びたいなっていうふうにまず思ったんですね。」 (G10 さん)
- [英国の大学に在学中] 「やっぱり日本人だし、日本というオプションは外せないかなというのがあったのと、あとあまり日本が良かったというよりは、海外にあまり興味がなかったんで。(中略)でも知り合いで1人、日本に留学、【日本のY大学】のプログラムに入学して、そこからイギリスに受験し直した先輩がいて、その子と結構仲が良かったので、いろいろ話は聞いていたんですけど。その子の影響で何となく海外も視野に入れ始めたというか。それで、そこから何となく日本以外にも調べ始めたのがあります。(中略)でも何となくやっぱり海外のほうが学習レベルが高いみたいな印象があったので。そういう意味ではせつかく海外にいて、しかもIBを取っているんで、そこで海外にいるチャンスがあるんだったら、そのまま続けてもいいんじゃないかというふうに考え始めて、そこからイギリスとアメリカを考え始めましたね。(中略)アメリカはやはりサマーキャンプに行つて。アメリカ行ったことがなかったんで、どういう感じかなっていうのを。で、すごく楽しかったんですけど、でもイギリスのほうが親と近いというのもあったし、学費の面も生活費とかもやはりアメリカはすごく高いので、というのもあって。あと3つ同時にアプライする、出願の時期が同じなので、三つはさすがに厳しいなってなって、消去法でアメリカを消した感じですね。」 (G11 さん)
- [英国の大学に在学中] 「正直希望というよりは、高校で寮に1人で残ると決めたときに、両親との契約ではないですけど、約束は『大学は日本に帰ってくるんだよね』みたいな、そういうのがあって。なので、最初は本当にイギリスの大学は考えていなくて、高校の初め。私、小さい頃から医学部に行きたかったんで、日本に帰って帰国子女受験で医学部を受けるかなというのがあったんですけど。Further Mathをやったり、大学受験の話をもみんながし始めたときに、日本の大学受験ってどうせ日本に帰ってからしかしないので、高校にいる間はみんなが出願するんだったら出しておくのは問題ないかなと思って、ちょっとイギリスの大学を調べて。イギリスで医学部に行く選択肢は、学費とかの関係でなかったんで、あと長さとかの関係でなかったんで、医学部じゃなかったら自分は本当に何が学びたいのかなと思って。医学部に行き

たいというのは、小学校 2 年生とかのときからずっと言っていて、自分で半分信じ込んでいたみたいなのなので。本当に自分が学びたいことを探し始めたときに、医療統計という分野があるんですけど、今まさにコロナとかそういうのを数式でアナライズするみたいな科目なんですけど、それにすごく興味を持って。数学が好きだったので、数学科に行こうと決めて大学受験の準備をしているうちに、私はケンブリッジに行きたかったのですが、ケンブリッジの受験とかが結構準備をするので、調べたり面接の準備をしていくうちに、イギリスの大学に行きたいなという気持ちが強くなって。

(中略) 私、日本の大学のオープンキャンパスみたいなのに、高校 1 年生の夏とかに行っただけなんですけど。すごく大教室で先生が 1 人立ってしゃべるといって、生徒と教授の関係がまず薄いんですし。あとオフィスアワーとかもあるみたいなんですけど、それがメインじゃないというか、大学生活のメインが勉強にないというのを感じて。日本の大学だったら、私は医科歯科大学だったら行きたいなって思ったんですけど。教授から学ぶという学び方、学ぶ方法というのが見えてこないのが問題だなと思って。日本の大学のオープンキャンパスとかに行ったら、講義とかも模擬講義みたいなのをやるんですけど、いろいろな大学が。それって多分、一番ベストなパフォーマンスを見せてくるじゃないですか。でもその授業がこの程度だったら、本当の授業ってどうなのかなって、すごく思ったり。大学に、ここで学びたいなと思わなかったというのが、一番簡単な言い方なんですけど。あとは大学生の知っている、友達じゃないんですけど、知っている大学生の生活とかを見て、メインはサークルで、今、特に同級生とかが日本の大学に行っているの、その通りだったなと自分で思うんですけど。 と思ったことが、一番大きいです。」 (G12 さん)

上記の語りから、日本の大学から海外の大学への進路変更のきっかけは、オープンキャンパス (G2 さん、G12 さん)、サマーキャンプ (G2 さん)、UWC への留学 (G10 さん)、先輩の影響 (G11 さん)、日本の大学の学習環境への疑問 (G11 さん、G12 さん) といった点にあると言える。すなわち、当初、日本の大学への進学を検討していた IB 修了生のなかには、オープンキャンパスや先輩とのやりとり等を通じて、日本の大学は「大学生活のメインが勉強にない」(G12 さん) のではないかという疑問 (イメージ) を抱くようになる。そして「そういう大学生活は送りたいくないな」(G12 さん) と考えた場合に、進路変更に至る。加えて、サマーキャンプといった海外の大学について知る機会も、「外」に目を開くきっかけとなるといえる。

### c) 一貫して日本の大学を希望

第三に、一貫して日本の大学を希望していた IB 修了生の語りを引用する。

- ・ 「希望していたというよりも、帰るのかなという。海外の大学は学費、基本的に高いので、日本に帰るんだろうなという感じでした。 (中略) 9 月入学、一応、考えたと思うんですけど、理系はちょっと 9 月入学、あまり充実してなかったというような印象がありましたね、特に国立だと。なので、理系に進みたかったので 4 月でっていう感じでした。 (中略) 場所というか、大学をどこを選ぶかっていうのは、あまり関係がないかなと思っていました。もともと理学に興味があったので、その理学の強みっていうのは、紙とペンさえあればどこでもできるし、誰とでも通じ合えるってことなので。お金っていう仮定を外しても、それがどうという話にはならなかったかなと思いますね。 (中略) 留学の機会は、一応設けられては、確かにいるんですけども、やっぱりさっき申し上げたように、数学っていう特性上、留学のメリットがもうほとんどないので、あまり選択肢にはなかったですね。」 (G18 さん)
- ・ 「小さい頃からずっとフィリピンに住んでいたの、日本の大学に行きたいっていう

のはずっと思っていて。その中で日本は結構、文系、理系って分かれているっていうのは聞いていたんですけど。日本の受験のスタイル、帰国子女受験にしても、理系だとまた一から理系の知識だったりっていうのを日本語で学び直さなきゃいけないっていうのを聞いていて、その受験のために。それは私にはできないなと思って。あとは、学部を見たときに、あんまりそこまで専門的に理系の何かをやりたいていうことはなかったの。もっと、私は結構、社会科学系のことに興味があったので。経済だったりとか、政治だったり、国際政治だったりとか、そういうことを幅広く学べる学部だったりとか。大学に行きたいなっていうのを、結構、12年生のときに思い始めて、それで、【所属大学】っていう大学を実は高校のとき、全く知らなかったんですけど。帰国子女がすごいたくさん行く大学受験用の予備校があって、そのときに、先輩だったりとか、先生にこういう大学がいいんじゃないっていうのを薦められて、今に至るっていう感じです。（中略）交換留学に行こうって思ったのは本当に大学に入ってからで。一つとして、IB だったりとか、高校までずっと英語の授業で頑張ってきた。日本の大学に入れたのはすごくうれしかったんですけど、どんどん日本に染まっていくというか、英語もちょっと、英語でそういう高レベルな会話だったりとか、授業を受けることも少なくなっていたので、それにすごい危機感を感じて。英語で高度な教育を受けられるところに1年、留学して、高校時代だったりとかの勉強を思い出したいなと思ったので、大学に入ってから交換留学、決定しました。」（G19さん）

- ・ 「日本で暮らしたいなっていうのが結構大きかったんですよ。さっき海外、住みたいとか言ってた、全然違うことになっちゃってるんですけど。日本で暮らしたいかなっていうのが結構大きかったの。あと学費ですね。もちろん奨学金取ればいい話なんですけれど。不確実なところでどうなんだろうなっていうので、海外はちょっと高いかなっていう。（中略）満喫しきったっていう感じだったのか、それとも暮らしやすさから日本がいいなっていう感じだったのか。」（G20さん）

一貫して日本の大学を希望していた理由として、数学という学問分野の特性（G18さん）、日本で暮らしたいという希望（G19さん、G20さん）、海外の大学の場合に奨学金を取れるかどうかというリスク（G20さん）といったことが挙げられた。G18さんの場合、数学を学ぶうえで場所や言語は関係ないとの考えから、日本の大学を選択し、在学中に留学も経験していない。他方、G19さんは一年間の交換留学を経験し、G20さんは英語プログラムに在学していることから、日本で暮らしながら、国際的な経験を得ていると言える。

#### d) 進路希望を海外の大学から日本の大学に変更

第四に、進路希望を海外の大学から日本の大学に変更したIB修了生の語りを引用する。

- ・ 「（海外の大学に入学願書を）出して、合格をもらっていたんですけど。やっぱり、海外、学費の問題もあるし、あとは、専門、自分が本当にやりたいことっていうのが、本当に分からなくて。分からない状態で海外に行ったところで、海外のプレッシャー、学業もすごい大変だっていうのは聞いていたので、その中で自分はやっていけるのかっていう不安があって。あともう一つは、IBで、結構、疲れてしまって、後半。高校3年生のときは本当に心も体も付いていなくて。だから、このメンタルとこの気持ちで行ってしまうと、多分、立ち直れないなっていうのが自分の中でどこかであって。だったら、日本の大学に入って。あともう一つが、将来、やっぱり日本で働きたいって高校生のときには思っていたので。もし海外に、そんなに好きな専門じゃないし、高いお金を払って、自分の生活に見合うかどうか分からないところに4年間行って、でも、結局、日本に戻ってくるなら、日本の大学でいいじゃんっていう

ふうになったんですね。」(G3さん)

- ・ 「周りに影響されていた部分とかもあったと思うんですけど、日本の大学って、どうしても、入ったらもう終わりっていうか、入ったら、そこからあんまり勉強しないみたいなイメージがあったので。そういう環境にいるのは、どうしても嫌だったっていうのはあったので。海外とか、もっと大学入学後、自分が成長できるような環境に身を置きたいと思ったので、海外の大学、考えていたっていうのもありますし。あとは、私が、環境問題とかに興味があって、そういう学問を学べるのは、日本よりも海外の大学のほうが、もっと専門的に学べるんじゃないかなっていうふうに思って、それで海外の大学を、一時期、考えているときはありました。(中略)海外も結構、迷っていたんですけど、お金の問題とか、そういうのも、もろもろ考えたときに、日本の大学に進学したほうがリスクは少ないんじゃないかなっていうふうに思って、決めたいって感じですね。(中略)早稲田とか、慶応とか、そういう大学に、もし進学できれば、その学校が提携している海外の大学のレベルとかもすごい高いので、それで別に1年交換留学とかしても全然いいなっていうふうに思ったので、それで国内の大学に進学を決めました。」(G4さん)
- ・ 「実際にアメリカの大学に行ったときに、その地のメディカルスクールの先生とお話とか少しさせていただいて。やっぱり外国籍の人だと、メディカルスクールに入るのがまず難しいっていうのがあって。で、外国人は自分の国で医学部出てから戻ってくるほうが、比較的、まあそっちも難しいんですけど、そっちのほうがやる人が多いっていうふうに聞いて。で、せっかく日本の大学も受けているなら、で、受かったならそちらの選択肢もあるのかなっていうふうに思います。」(G5さん)
- ・ 「結構、最後まで海外に行こうっていうところは悩んでいたのですが、日本に行きたい、帰りたいっていう方。純粹に就職とかの面で、日本の大学に行った方がいいんじゃないかなっていうふうに考えていたので。ちょっと行きたい大学とかはなく。その中で、行きたい学部だけはあったので、そこを中心にいろいろ。それこそ、就職に有利そうな、上から大学見ていって受験したっていう感じですね。(中略)4年生としてよかったなっていうふうに思うところは、就職関連のところ、結構、有利に働いたところはあったんじゃないかなっていうふうに。例えば卒業生の方とのパイプとかっていうのが結構あるので、こういった面ではよかったとは思いますが。同時に、高校の頃みたいな、英語に触れるっていうような機会があまりなかった。逆によかったっていうんだとしたら、【所属大学】が結構、海外に留学生を出しているの、僕も1年間、留学に行かしていただいて。そういった面では、海外と日本、両方いいとこ取りができたんじゃないかなって考えています。」(G13さん)
- ・ 「私は、最初はオーストラリアの大学に進みたいなっていうふうに考えていて。ただ、学費が本当に半端なかったの、奨学金がもらえないとね、みたいなことを家族と話してっていうふうにはなっていて。なので、一応、メルボルン大学だったんですけど、行きたかった所が。メルボルン大学にも応募したんですけど、奨学金の枠に、多分、1とか足りなくて、もらえなかったんですね、結局。(中略)教員になりたいなっていう、そのときちょっとだけ芽生えていて。その選択肢だとかっていうのを考えたりとか、自分が将来どこで働くかってことを考えると日本なのかなって思ったので、大学は日本にしました。(中略)私、結構、日本の大学受験をするために、日本語で何かを勉強しなきゃいけないのがすごく嫌。日本語で数学勉強したりとか、そういう試験を受けなきゃいけないってのがすごく嫌だったので、そんな両立はできないっていうふうにすごい思っていて。あとは、IBでこんなに頑張った



って自分で思っていたので、それを見て、決めてくれるところに絞って探していたので。となると、すごい選択肢も少なくなるんですけど、でも、【所属大学】の勉強内容にひかれたのももちろんそうなんですけれど、結構、試験のかたちとして、頑張りをみてる面が見て取れたんですよ。（中略）【所属大学】は、高校 3 年間に相当するところの成績と、卒業見込みが、大抵、その成績に関する書類として、他の大学とかからも出さなきゃいけない書類になるんですけど、それの他に、3 年間の諸活動、こういうことやりましたっていうことを、結構、詳しく書かせるものがあったりとか、あなたが海外で学んだことは何ですかっていう設問があったりとか、あなたはどのような勉強していましたかっていうのがあったりとか。あとは、その他に志望動機と課題のエッセイがあったので。何だかすごい、それは、私の中身を知ろうとしてくれているなっていうのが伝わってきて、ひかれましたね。」（G14 さん）

- 「中学のときはずっと、アメリカの大学に進学したいと考えていました。ミシガン出身なので、いつかあそこに戻りたいっていう思いでミシガン大学がいいなとずっと思っていたんですけど。高校でイギリス、ロンドンまで行ったときに、一応ロンドンの大学も見学したんですけど、イギリス国籍を持ってないので、授業料が普通のイギリス人の生徒と比べると、インターナショナルの生徒はその 4 倍の学費を払わされることに衝撃を受けまして、ロンドンは無理だなと。そのところから、進学先はもう少し学費の安いところがいいと思ってまして。アメリカの場合は、そのときに SAT を取らないと大学進学条件に入らないんですけど。IB と SAT の勉強を両立させることがとても難しいっていうのを、もう一人、IB と SAT を両立しているクラスメートがいて、その人はもう 2、3 回、SAT を取っていて、その人の苦勞を見ていたので、アメリカもちょっと厳しいかなと思い、結局、日本に戻りました。（中略）（親からは）大学自体が、海外の大学進学するのはちょっと経済的に厳しいかもしれないって言われて。それなら日本の長期留学があるところを選んだらどうみたいなを言われました。」（G15 さん）
- 「医学部に行きたいっていうのは、思っていたんですけど。実際にそれで何かアクションを起こしたかって言われたら、そういうわけじゃなくて。ただ、医学部受験の夏期講習みたいなのに、11 年生の夏に行ったんですね。で、その印象がとてつもなく悪くて。（中略）そこで、迷い始めて。他の大学のオープンキャンパスとかも行って。それで、多分、11 年生の冬ぐらいに、うーんって思って。まだ何が自分でしたいのか分からないのと、あと、歴史がすごい好きになったんですね、その先生が。最初は、全然、歴史を取るつもりじゃなかったんですけど。たまたま取った歴史が好きになって、もっと学びたいなっていう気持ちが出て。だったら、リベラルアーツがいいなっていうので。多分、11 年生の冬ぐらいから、ICU とか、早稲田の国際教養学部とかを考え始めたんだと思います。（中略）正直、日本で暮らしたことがなかったので、日本で暮らしたいなっていうのと、日本語も英語もどっちも伸ばしたいなっていうのもあって。あとは、学費の問題で。やっぱり、日本が一番安いっていったら。」（G16 さん）
- 「やっぱり 2 年じゃ足りないなと思って、海外経験が。自分の中でまだ終わりたくないという気持ちが強かった時期もあって、海外で大学行けるなら、行きたいなと思っていたんですけども。そのときは、まだ学部をあまり決めてなくて、漠然と思っていたので。今の学部を決めるってなったときに、法学部なので、やっぱり日本の法について、日本語でまず学んでから、もしまだ興味があったら、海外の大学に行ってもいいかなと思うようになりました。（中略）国立私立に拘わらず、絶対に、留学制度、こういうのがありますよって、どの大学も提示してくださって。それだったら、日

本に帰っても、ずっと日本に縛り付けられるのではないですけど、日本にしか選択肢がないっていうわけではないんだなと思ったら、そんなに抵抗なく、帰ってくる選択をできたなと思います。」(G17さん)

進路希望を海外の大学から日本の大学に変更した理由として、学費・金銭面(G3さん、G4さん、G14さん、G15さん)、専門が未定(G3さん、G16さん)、心理的安定(G3さん)、日本の大学のグローバル化(G4さん、G13さん、G17さん)、学問分野(G5さん/医学、G17さん/法学)、将来日本で働きたい(G13さん、G14さん)、日本で暮らしたい(G16さん)といったものが挙げられる。進路希望を日本の大学から海外の大学に変更した場合に比して、明確なきっかけ(出来事)があり、進路希望の変更に至っているわけではないと言える。また、やはり、金銭的なハードルを越えられず、日本の大学への進学に至った事例が複数確認された。

## 2-2-2. 海外の/日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何か

IB 修了生にとって、海外の/日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何か。この点について本項では検討する。インタビュー調査の結果に基づく、a) 情報収集と、b) 奨学金(経済的要因)、以上2点が主な阻害要因として析出された。

### a) 情報収集

第一に、情報収集に関連する語りを引用する。

- 「これも辛いところではあったんですけど。情報が全然ないっていうのと、大学を訪問できないっていうのが、難しいと感じるところがありましたし。あとは、私の高校の進路指導があまり、充実してなくて、国内進学の生徒も困っていたのですけれど、特に海外進学をした私は、1人でやってねみたいなところがあって、サポートできないわみたいな感じだったので、孤独だったっていうか。なので、もう全部ネットとかです。」(G1さん)
- 「アメリカの大学の話になると、その先生も、あまりアメリカの大学のことを知らなくて。アメリカの大学、DPの試験、スコアっていうものが、アメリカの大学に、あんまり反映されないっていうか。例えば、オーストラリアの大学だったりとか、イギリスの大学だったりとか、アジアの大学だったりっていうのは、IBスコアを重要視するように、僕はそう思う。でも、アメリカっていうのは、総合的に評価するので。IBもそこまでアメリカで浸透していないから、それで、その進路指導の先生も、IB専門の先生なので、あまりアメリカの大学のことについて、詳しくなくて。だったので、結局、1人になってしまって。」(G2さん)
- 「学校では、大学を選ぶためのサポートの先生っていうのが一応、いたんですけど、残念ながらとても頼りにならなくて。本当に、大学の知識もあまりないし全然、頼れなかったんで、ほとんど自分で、他の友達もどうやっているかっていうのを聞いて。」(G9さん)
- 「UAC、ユニバーシティ・アドバイザー・カウンセラーみたいな人が1人、先生が1人付いて、最初に会ったときにはどこ行きたいの、どこ考えているのみたいな。今の成績だったらここには行けるよみたいなことを話したりして。あとは(自分で)決めてきた。多分、イギリスだったらパーソナル・ステートメントを書くときにそれを直してくれる人みたいな感じで。それを一緒に見ながら提出してから受かるまで全部、見てくれる人が生徒1人に付くみたいな感じでした。」(G6さん)

- ・ 「学校からのサポートは、私のインターは、結構、手厚くやってくれている方だとは思ったんですけど。12年生のときに、生徒は必ず1回、学年のカウンセラーさんと1対1で話して、進路について話すっていう時間がある。でも、私の場合は、ずっと日本の大学を希望していたので、カウンセラーさんも日本の大学の事情っていうのはあまり深く知らなくて、本当に慶應と早稲田ぐらいしか知らないみたいな感じだったので。でも、先輩を紹介してくれたりだとか、ジャパニーズのクラスを取っていて、それを取っていた先輩が大学入った後にまた戻ってきてくれて、いろいろ話をしてくれたりだとか、そういうことはすごくしてくれたので。どういう大学があるのかを知るだけでも、結構、違ったのかなと思って。日本人は多分、縦のつながりがすごく強かったので。結構、日本語の先生だったりとか、カウンセラーさんも率先してOBさん、OGさんを連れてきてくれたりして。それはすごく良かったかなと思う。」 (G19さん)

進学に関する情報収集に関連して、一人で頑張らなければならなかったという状況 (G1さん、G2さん、G9さん)、反対に、学校からのサポートが手厚かったという状況 (G6さん、G19さん) が両方確認された。学校からのサポートが手厚かったという状況は、海外のIB認定校出身者からのみ聞かれたが、一人で頑張らなければならなかったという状況は、日本のIB認定校出身者と海外のIB認定校出身者の両方から確認された。今後、日本のIB認定校の増加に伴い、進路指導カウンセラーの配置を含めて、いかに適切に海外の大学への進学に必要な情報を提供できるかが課題になると思われる。

#### b) 奨学金 (経済的要因)

第二に、奨学金 (経済的要因) に関連する語りを引用する。

- ・ 「いろいろ、日本の財団とか、奨学金関連の募集とか、探してみたんですけどすごく少なくて。あとは、専攻をすでに決めていないといけない奨学金とかもあって。例えば、私たちは理系のこの専攻しか支援しませんとか、数学だけとか、すごく限られていて。あとは、大学自体を絞っている奨学金機構とかもあって。専攻とかはまだ決めたくなかった私からすると、すごく少なかったなって、選択肢がなかったなっていうのはあります。だから、もう少しいろいろな、政府っていうよりはいろいろな財団が、幅広く海外留学を支援してくれたらっていうのは感じます。」 (G1さん)
- ・ 「でもやっぱり、奨学金が、結局最後の決め手というか。お金がないものは、入れないので、大学には。一番出してくれたのが、そこだったので。最終的に合格通知が出て、どれに絞ろうかというようなタイミングのときに、奨学金が一番多い所。残念ながら、僕の場合は、民間の団体の奨学金がもらえなかった。JASSOもそうでしたけど。JASSOは応募しなかったんですけど。DPが忙しくて。」 (G2さん)
- ・ 「海外大学に進学するときに、給付型の奨学金を提供されていると思うんですけど、先ほどGPAが3.7以上ないと駄目みたいな感じのことを書かれていたと思うんですけど、それも、IB生向けというよりは、一般の高校生も含めて作られた基準だと思うんですよ。GPA3.7って一律設定するのは、ちょっとどうなんだろうっていうふうに、個人的に思っていて。やっぱり応募する人数とかも多いと思うので、一定の基準っていうのは必要だと思うんですけど。偏差値50台の学校の3.7と、偏差値70台の3.7って、意味が違うって個人的に思っているので。そういうところも含めた審査っていうのも、一つ、必要なかなっていうふうに思っていて。二つ目は、GPAだけじゃなくて、SATとか、IBとか、Aレベルとか、そういう海外の試験の点数の基準と

かでも決めてほしいなっていうふうに思いました。」 (G4 さん)

- ・ 「一番最初に JASSO っていう話があったんですけど、あれもすごい調べて、日本の高校卒業していないと駄目っていうので、駄目かっていうので。それで、なんでやねんみたいな感じ。日本人なんだけどなどか思いながら、でもしょうがないかっていう。」 (G7 さん)
- ・ 「ネックにならない訳のない金額なので、アメリカの。だから仕方ないと言えば仕方ないんですけどね。増えてきているのは承知なんですけれど。国内からとか国外からでも、いろいろな奨学金制度が充実してきているっていうのはあるんですけど、まだまだ全然、足りていないかなっていうような。特に IB やっている人に関してはすごく足りていないかなっていうふうに思ったりはしていますね。」 (G10 さん)
- ・ 「かなり選抜基準というのが曖昧なので、結局もらえなかったんですけど。その理由が何もないので、そういうところのフィードバックがあるとこちらも、例えばもう一度提出したいと思うときに、役に立つかなとは思いますが。」 (G12 さん)
- ・ 「奨学金を出すときにもうちょっと枠を、いろいろ別にしてもいいんじゃないかなっていうふうにはすごく思っていて。例えば、それこそ、私みたいに、国際バカロレアを得てきた子たちの枠とか、あとは、アメリカの SAT を得てきた子の枠とかっていうのがあってもいいんじゃないかなと思ったりとか。あとは、やっぱり、文系の奨学金は少ない印象があります。そこはしょうがないというか、日本社会的に、やっぱり、理系が必要とされている点で、差が出てしまうのだと思うんですけど。あとは、理系は学費高いですし、出てしまうと思うんですけど。もうちょっと文系の奨学金制度みたいなものが充実したらいいなっていうふうには、当時は思っていました。」 (G14 さん)
- ・ 「基準がもう少し、何ていうんでしょ、奨学金を受けられる範囲をもう少し広げてもらいたかったですね。ぎりぎり受けられないっていう、受けられなかったの。それでもそこまで経済的にいいわけでもなく、悪いわけではないんですけど、もし範囲が広がったらよかったかなと。受けられることがあればよかったんですけど。」 (G15 さん)

以上の語りより、奨学金制度をめぐって、分野を限定せず幅広く支援してほしい (G1 さん)、理系だけでなく文系に対する支援を厚くしてほしい (G14 さん)、JASSO の奨学金の締切りと IB の最終試験の時期が重なるため考慮してほしい (G2 さん)、GPA の基準を全ての高校で一律に設定するのを見直してほしい (G4 さん)、日本の高校出身者に限定されて応募が叶わなかった (G7 さん)、選考に漏れたときにその理由をフィードバックしてほしい (G12 さん)、経済状況の基準をわずかに満たせなかったため、もう少し範囲が広がったら良かった (G15 さん) 等、多様な意見を聞くことができた。これらは、奨学金制度から漏れ出てしまった学生を含め、当事者の貴重な経験や意見である。これらの知見を基に今後の制度改善につなげていく方途について検討する必要があると考える。

### 3. 終章

#### 3-1. 研究成果

研究成果として、以下4点を述べる。

第一に、岩崎（2007b）による、日本の大学の教育内容に対して「その教育内容の劣悪な評判」という表現を用いながらも、「過去の消化と未来に向けた充電」のために日本の大学への進学を選択したIB修了生が存在するという指摘と類似の結果を、本研究でも得られた。換言すると、心理的安定を求めて、あまり負荷がかからないと認識している日本の大学への進学に至るIB修了生が存在している。しかしながら、負荷がかからない（あるいは学問ではなくサークル活動等が中心になる）と、日本の大学が認識されることは、反対に日本の大学ではなく海外の大学へ進学しようという動機を強化する側面ももつ。今後、日本の大学が学問的熱意に満ち溢れた学生を獲得しようとするのであれば、大学生活の中心が学問にはないといったイメージを払拭する必要がある。

第二に、小林による指摘、すなわち、「高校生活の前半時点で海外の大学を志望しながらも最終的には国内の大学へと進学した層は（中略）海外で学位を取得するために長期間日本を不在にする長期留学よりも、日本国内の大学に進学した後に語学研修や交換留学等の制度を利用して短期留学を実践することにより、『グローバルな文化資本』と『ローカルな文化資本』の両方を獲得する」（小林 2019: 25）という合理性を求めているのではないかという指摘は、本研究の結果に拠れば、支持される。なぜなら、日本の大学に進学後に留学の機会が確保されていることを、日本の大学へ進学した理由として挙げたIB修了生を複数確認できたからである。事実、「海外と日本、両方いいところ取りができたんじゃないかなって考えています」（G13さん）という語りによって象徴されるように、交換留学によって「いいところ取り」ができた自身の大学生活を振り返ったインタビューイがいた。このことを踏まえると、学士課程段階における海外への長期留学を促進することを望むのであれば、日本の大学における留学機会の拡充はマイナスに働く可能性がある。

第三に、オープンキャンパスやサマーキャンプは、特に海外大学への進学を目指すきっかけになり得る。今後、学士課程段階での海外への長期留学の促進を目指すのであれば、海外の大学の環境に、短期間でも、より多くの高校生が触れる機会を確保することが有用であると言える。加えて、以下の指摘が重要である。

- ・ 「もっといろんな社会人の方と話す機会、実際にアメリカの大学を出て、社会人になっている方と話す機会があったらなというのはすごく思っ。大学生だとか卒業して数年みたいな方だと、やっぱり本当に短期的な視点でしか語ってくれないので。この大学が、GPAがとか、ここの大学はいろいろな授業が取れるからって言われたって、いろいろな授業、取れるから何なのみたいなところが、教えてくれないじゃないですか。あたかもいいみたいな、知ったかぶりじゃないですけど。しょせん2、3年、上の人に聞いたところで、何も分からないっていうのはあって。だから、もっと10年、20年、30年と、大学を卒業して社会人として経験を積まれている方に、お話が聞ける、アメリカの大学卒業生の方に聞く機会があったら。もっと、後悔はしてないんですけど、現段階では、もうちょっと柔軟な志望校選びができたかなっていうふうに思いました。」（G10さん）

すなわち、海外の大学の卒業生に、長期的な効果を発信してもらうことは、日本の大学や海外の大学を含めて、幅広い選択肢のなかからより適切な進路を選択する助けになるかもしれない。

第四に、やはり海外の大学の学費の高さ（日本の大学の学費の相対的安さ）は、日本の大学志向を高める。海外の大学進学を促すためには、奨学金制度の拡充が不可欠である。また、オランダの大学に在学中のIB修了生が確認されたが、オランダは、比較的授業料が安価でかつ英語プログラムが実施されている国の一例と言える。安価に英語で学べる国

(大学)に関する情報を整備することで、経済的な理由によって海外で学ぶことを断念する若者の減少につながられると思われる。

### 3-2. 今後の課題

本稿は、研究経過報告書という位置づけである。ゆえに、研究課題 2 および 3 に関して、結果を述べることができていない。今後は、日本の IB 認定校における調査の実施および IB 修了生に対するインタビュー調査のデータのさらなる分析により、研究課題 2 および 3 に取り組む予定である。

## 引用参考文献

- 岩崎久美子 (2007a) 「在学生調査—ディプロマ・プログラム受講前から卒業まで」『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、72-98.
- 岩崎久美子 (2007b) 「大学との接続調査—ディプロマ取得と大学入試」『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、99-127.
- 岩崎久美子編 (2018) 『国際バカロレアの挑戦—グローバル時代の世界標準プログラム』明石書店.
- 岡村郁子 (2017) 『異文化間を移動する子どもたち—帰国生の特性とキャリア意識』明石書店.
- クレスウェル、J. W.・プラノ クラーク、V. L. (2010) 『人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』(大谷順子訳) 北大路書房.
- 小林元気 (2019) 「高卒後の進路における海外大学進学志向の規定要因」『日本高校教育学会年報』26(18)、18-27.
- 渋谷真樹 (2016) 「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」『教育学研究』83(4)、423-435.
- 高崎朋彦 (2013) 「海外進学の研究」『研究紀要／東京学芸大学附属高等学校』(50)、71-78.
- 渋谷真樹 (2016) 「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」『教育学研究』83(4)、423-435.
- 永山賀久 (2013) 「グローバル人材育成と国際バカロレアについて」『化学と教育』61(7)、330-333.
- 三戸親子 (2001) 「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第 69 集、103-123.
- リクルート (2009) 「特集 高校進路指導現場の困惑 リクルート『高校の進路指導に関する調査』」『カレッジマネジメント』155.

資料（アンケート調査単純集計、インタビューガイド等）

【巻末資料1：国際バカロレア修了生（大学生）対象アンケート調査単純集計】

回答件数：N=38

Q1. 性別

1. 男性 N=11 (28.9%)
2. 女性 N=26 (68.4%)
3. 無回答 N=1 (2.6%)

Q2. あなたの年齢を教えてください。

年齢	人数	割合
18歳	5	13.1
19歳	13	34.2
20歳	8	21.0
21歳	5	13.1
22歳	3	7.8
23歳	4	10.5
総数	38	100.0

Q3. あなたの出身の高校についてもっとも当てはまるものを教えてください。

学校種	人数	割合
1. 日本の高校（公立）	2	5.2
2. 日本の高校（私立）	2	5.2
3. 日本国内のインターナショナルスクール	1	2.6
4. 海外の現地校	2	5.2
5. 海外の日本人学校	0	0.0
6. 海外のインターナショナルスクール	31	81.5
総数	38	100.0

Q4. あなたの出身の高校名を教えてください。

省略

Q5. あなたは現在、海外の大学と日本の大学のどちらに在学していますか、教えてください。

1. 海外の大学に在学している N=13 (34.2)
2. 日本の大学に在学している N=25 (65.7)

Q6. あなたが現在在学している大学名を教えてください。

省略

Q7. あなたが現在所属している学部・学科を教えてください。

省略

Q8. あなたが進学した大学は、第何希望でしたか。

志望順位	人数	割合
第1志望	28	73.6



第2志望	5	13.1
第3志望	3	7.8
第4志望	1	2.6
無回答	1	2.6
総数	38	100.0

Q9. あなたの現在の学年を教えてください。

学年	人数	割合
Gap Year	1	2.6
大学1年	15	39.4
大学2年	9	23.6
大学3年	8	21.0
大学4年	4	10.52
大学5年	1	2.6
総数	38	100.0

Q10. あなたはなぜIBDPを履修しようと思いましたか。該当する項目全てを選択してください。（複数選択可）

履修理由	人数	割合
海外の大学進学を希望したから	11	28.9
高校において英語による授業を多く受けたかったから	8	21.0
IBの教育の方法や内容に関心があったから	16	42.1
その他（1番最初に合格をもらったから／親からのアドバイス／UWCのカリキュラムがIBだったため必然的に履修しました。／イギリスの高校はGCSEの取得を前提としており、受けていなかったためインターナショナルスクールしか選択肢はなかったため／それ以外の選択肢を考えず、また選択余地もなかったため／海外で育ったから／IBよりも先にUWCに興味を持った方／行っていた高校がIB校だったため／高校で大半の生徒が履修していたから／受験で有利になると思ったから／日本の大学受験のため／高校のほぼ全員が履修していて、履修するのが当たり前だったから。／高等学校で履修が必須であったから。／国際バカロレア入試で受験するため／周りがとっていたから／難しいと聞いており、自分自身への挑戦になると感じたことと、感じたことと、海外生活の集大成になると感じていたから。／日本のトップ大学の受験資格のため	17	44.7
総数	—	—

(N=38)

[海外の大学に在学しているIB修了生への質問]

Q11. あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか。

1. 高校入学時から高校卒業時にかけて、一貫して海外の大学への進学を希望していた  
N=9 (69.2)
2. 日本の大学への進学を希望していたが、海外の大学への進学を希望するようになった  
N=4 (30.7)

Q12. 以下の項目のうち、あなたが海外の大学への進学を希望した理由としてあてはまる項目を全て選択してください。（複数選択可）

海外大学志望理由	人数	割合
外国語（非日本語）で教育を受けたかったから	9	69.2
海外で（日本よりも）質の高い教育を受けたかったから	10	76.9
自分には、日本の教育よりも、海外の教育の方があっていると思ったから	8	61.5
海外で生活したかったから	6	46.1
IB の成績や経験を活かして入学試験を受けたかったから	9	69.2
授業料が安価だから	2	15.3
奨学金が充実しているから	0	0.0
親にすすめられたから	2	15.3
将来、海外で就職したいから	8	61.5
その他	0	0.0
総数	—	—

(N=13)

Q13. 以下の項目のうち、海外の大学への進学を希望するにあたって、あなたが高校生のときに心配していたことや不安に思っていたことを全て選択してください。（複数選択可）

海外大学進学不安	人数	割合
英語力（その他外国語力）に不安があった	3	23.0
IB の成績に不安があった	4	30.7
海外の治安や差別に不安があった	2	15.3
授業料や生活費の確保に不安があった	6	46.1
奨学金に関する情報が不足していた	6	46.1
海外の大学への進学に関する情報が不足していた	6	46.1
IB ディプロマの資格を用いて受験できる大学が少なかった	3	23.0
特に心配や不安はなかった	4	30.7
その他	0	0.0
総数	—	—

(N=13)

[日本の大学に在学している IB 修了生への質問]

Q14. あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか。

1. 高校入学時から高校卒業時にかけて、一貫して日本の大学への進学を希望していた  
N=12 (48.0)
2. 海外の大学への進学を希望していたが、日本の大学への進学を希望するようになった  
N=10 (40.0)
3. その他 N=3 (12.0%) (高校入学時は特に何も考えていなかった／最後の最後まで日本の大学か海外の大学か悩んでいました。／日本→海外→日本とかなり迷った)

Q15. 以下の項目のうち、あなたが日本の大学への進学を希望した理由としてあてはまる項目を全て選択してください。（複数選択可）

日本の大学志望理由	人数	割合
日本語で教育を受けたかったから	8	32.0
日本で（海外よりも）質の高い教育を受けたかったから	2	8.0
自分には、海外の教育よりも、日本の教育の方があっていると思ったから	4	16.0
日本で生活したかったから	16	64.0
IB の成績や経験を活かして入学試験を受けたかったから	8	32.0
授業料が安価だから	19	76.0
奨学金が充実しているから	1	4.0
親にすすめられたから	4	16.0
将来、日本で就職したいから	10	40.0
その他（日本の大学の海外提携校が良かったから／志望する分野について母国でまず学ぶことが重要だと考えたから。）	2	8.0
総数	—	—

(N=25)

Q16. 以下の項目のうち、日本の大学への進学を希望するにあたって、あなたが高校生のときに心配していたことや不安に思っていたことを全て選択してください。（複数選択可）

日本の大学進学不安	人数	割合
日本語力に不安があった	5	20.0
IB の成績に不安があった	6	24.0
日本での差別に不安があった	3	12.0
授業料や生活費の確保に不安があった	1	4.0
奨学金に関する情報が不足していた	0	0.0
日本の大学への進学に関する情報が不足していた	10	40.0
IB ディプロマの資格を用いて受験できる大学が少なかった	9	36.0
特に心配や不安はなかった	6	24.0
その他（はじめは海外の大学に進学しましたが、いろいろな事情があって日本の大学に編入しました。日本の大学受験を経験した同期と(知識量など)互角にやっつけていけるか心配でした。／TOEFL iBT のスコアに不安があった)	2	8.0
総数	—	—

(N=25)

Q17. あなたは大学入学後に海外留学を経験していたり、予定したりしていますか。

留学経験	人数	割合
海外留学を経験しておらず、今後する予定もない	10	40.0
短期留学を経験した。あるいは、今後予定している	3	12.0
長期留学を経験した。あるいは、今後予定している	8	32.0
短期留学と長期留学を両方経験した。あるいは、今後両方を予定している	2	8.0
その他（経験していませんが、してみたいです。／	2	8.0

今後してみたいと思う)		
総数	25	100.0

[高校在学時に進路希望に変更があった（日本の大学→海外の大学）IB 修了生への質問]

Q18. あなたはなぜ進路希望を、日本の大学から海外の大学に変更しましたか。その理由やきっかけを教えてください。（自由記述）

省略

[高校在学時に進路希望に変更があった（日本の大学→海外の大学）IB 修了生への質問]

Q19. あなたはなぜ進路希望を、海外の大学から日本の大学に変更しましたか。その理由やきっかけを教えてください。（自由記述）

省略

[全員]

Q20. IB の学習で、あなたの進路選択のきっかけになったことはありますか。あるいは、あなたが進路を考えるうえで、IB の学習がいかに影響を与えましたか。ご自由にお答えください。（自由記述）

省略

Q21. IB 履修生がより良い進路選択を実現するために、どのような支援や制度改善が必要と考えますか。ご自由にお答えください。（自由記述）

省略

【巻末資料2：国際バカロレア修了生（大学生）対象インタビューガイド】

国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究  
質問項目

調査時期：2020年〇月×日

調査場所：オンライン（Zoom）

調査対象者：国際バカロレア（IB）修了生 X 様

調査実施者：菊地かおり（筑波大学）、江幡知佳（筑波大学大学院）

調査目的：本研究の目的は、日本の国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）認定校における IB 履修生、並びに、日本の／海外の大学に在学している IB 修了生を対象として、彼らがいかなる過程で進路意識を形成してきたかを明らかにすることである。このことを通じて、IB 履修生に対する望ましい進学支援の在り方を検討する。

調査時間：約 1 時間／1 人

質問項目：

1. これまでの学校歴について

1 これまでの学校歴を教えてください（就学前段階、初等教育段階、前期中等教育段階、後期中等教育段階、現在）。

2. 高校時代に IB を選択した理由について

1 IB 認定校に進学した理由を教えてください。また、いつ頃、なぜ、IB の履修を決定しましたか、教えてください。

2 IB の履修を選択したことを後悔したことはありますか。もし後悔したことがあるのであれば、それはなぜですか、教えてください。

3. 大学進学希望について

1 現在在籍している大学（XX College）を含めて、志望（出願）大学をどのように決定しましたか、また、どのようなことを期待して、進学先を選択しましたか、教えてください。

2 高校在籍時に、大学進学希望の内容が変わったことがありますか（例：以前は米国以外の大学への進学を希望していたが、米国の大学への進学を希望するようになった、等）。もし希望の内容が変わったことがあるのであれば、いつ頃、どのように変わりましたか、教えてください。（※日本の大学として想定されていたのは日本語によるプログラムか？英語によるプログラムか？）

3 あなたが進路を考えるうえで、IB の学習がいかに影響を与えましたか。例えば、「知の理論（Theory of Knowledge: TOK）の学習を通じて、〇〇学部を志望するようになった。なぜなら……」のように、できるだけ具体的に教えてください。

4. 進路選択の際に感じた困難とそれをどのように乗り越えたか

1 以下の項目のうち、高校在学時のあなたの進路選択において、困難と感じていたものがあれば、教えてください。あわせて、その困難をどのように乗り越えたか（乗り越えられなかったか）を教えてください。

- ・ 金銭面、奨学金制度
- ・ 入試に関する情報収集
- ・ 語学力

- ・IBの科目選択
- ・その他

#### 5. 高校での進路指導について

- 1 高校在籍時に、いかなる進路指導を受けましたか（高校からの働きかけで、留学フェアなどに参加することはありましたか）、教えてください。

#### 6. 保護者や先輩・友人の進路選択への影響について

- 1 これまでに、保護者から、進路についていかなる助言等がありましたか、教えてください。
- 2 進路選択に際して、先輩や友人から影響を受けることはありましたか、教えてください。

#### 7. 塾や予備校、家庭教師等の利用について

- 1 高校在籍時に、塾や予備校、家庭教師等を利用していましたか、教えてください。
- 2 これまで、塾や予備校、家庭教師等の利用を通じて、あなたの進路意識に影響を与えられた経験があれば、教えてください。

#### 8. 自身の進路選択に対する評価について

- 1 あなたは、現在在籍している大学へ進学してよかったと考えますか（進路選択に満足していますか）、また、入学前に抱いていた期待は満たされていますか、教えてください。
- 2 自身の進路選択（大学選択）について、後悔していることがあれば、教えてください。

#### 9. （海外の大学在学者向け）大学での学習経験について

- 1 大学でのおおよその学業成績を教えてください（GPA、あるいは、上位・中位・下位など）。また、大学における学習の難易度をどのように感じているかを教えてください。
- 2 大学在学中に、どのような場面でIBの履修経験が活きていると考えますか、また、どのような場面でIBで得た能力を伸ばせていると考えますか、教えてください。
- 3 現在、大学での学習を進めるうえでの困難があれば、教えてください。
- 4 海外の大学で（海外で）学ぶ意義をどのようにとらえているかを教えてください。

#### 9. （日本の大学在学者向け）大学での海外経験・学習経験について

- 1 大学在学中に得た、あるいは得る予定の海外経験（短期留学、長期留学、その他）の内容を教えてください。
- 2 国内大学に進学された理由として、「国内大学に進学しても短期留学・長期留学ができること」がどの程度当てはまりますか、教えてください。
- 3 大学でのおおよその学業成績を教えてください（GPA、あるいは、上位・中位・下位など）。また、大学における学習の難易度をどのように感じているかを教えてください。
- 4 大学在学中に、どのような場面でIBの履修経験が活きていると考えますか、また、どのような場面でIBで得た能力を伸ばせていると考えますか、教えてください。
- 5 現在、大学での学習を進めるうえでの困難があれば、教えてください。

#### 10. 奨学金の仕組みについて

- 1 奨学金の仕組みについて、何かご意見があれば教えてください。

### 【巻末資料3：国際バカロレア履修生（高校生）対象インタビューガイド】

## 国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究 質問項目

調査時期：2021年〇月×日

調査場所：オンライン（Zoom）

調査対象者：国際バカロレア（IB）履修生 Xさん

調査実施者：菊地かおり（筑波大学）、江幡知佳（筑波大学大学院）

調査目的：本研究の目的は、日本の国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）認定校におけるIB履修生、並びに、日本の／海外の大学に在学しているIB修了生を対象として、彼らがいかなる過程で進路意識を形成してきたかを明らかにすることである。このことを通じて、IB履修生に対する望ましい進学支援の在り方を検討する。

調査時間：約30～40分／1人

質問項目：

#### 1. これまでの経歴について

- 1 これまでの学校歴を教えてください（国公立の別、など）。
- 2 これまで、海外に滞在したことがありますか。もし滞在したことがあるのであれば、どの国に、いつ頃（どのくらいの期間）滞在されていたかを教えてください。

#### 2. IBを選択した理由について

- 1 IB認定校に進学した理由を教えてください。また、いつ頃、なぜ、IBの履修を決定しましたか、教えてください。
- 2 IBの履修を後悔したことがありますか。もし後悔したことがあるのであれば、それはなぜですか、教えてください。

#### 3. 大学進学希望について

- 1 現在、大学への進学を希望していますか。もし希望しているのであれば、希望の具体的な内容（例：海外／国内大学への進学を希望している、〇〇（国）の大学への進学を希望している、日本の国公立／私立大学への進学を希望している、具体的に××大学への進学を希望している、等）を教えてください。
- 2 いつ頃、どのような経緯で、3-①でお答えいただいたように大学進学を希望するようになりましたか、教えてください。
- 3 これまでに、大学進学希望の内容が変わったことがありますか（例：以前は海外大学への進学を希望していたが、現在は国内大学への進学を希望している、等）。もし希望の内容が変わったことがあるのであれば、いつ頃、どのように変わりましたか、教えてください。
- 4 あなたが進路を考えるうえで、IBの学習がいかに影響を与えましたか。例えば、「知の理論（Theory of Knowledge: TOK）の学習を通じて、〇〇学部を志望するようになった。なぜなら……」のように、できるだけ具体的に教えてください。

#### 4. 進路選択に関して感じている困難

- 1 以下の項目のうち、あなたの進路選択において、困難と感じているものがあれば教えてください。あわせて、必要とする支援などがもし思いつきましたら、教えてください。
  - ・大学進学にともなう授業料や生活費の確保、奨学金制度

- ・入試に関する情報
- ・語学力
- ・IBの科目選択
- ・新型コロナウイルスの影響
- ・その他

#### 5. 高校での進路指導について

- 1 これまでに、あなたの所属する高校において、いかなる進路指導を受けてきましたか、教えてください。

#### 6. 保護者や先輩・友人からの進路に関するはたらきかけについて

- 1 これまでに、保護者から、進路についていかなる助言等がありましたか、教えてください。
- 2 これまでに、進路選択に際して、先輩や友人から影響を受けることはありましたか、教えてください。

#### 7. 塾や予備校、家庭教師等の利用について

- 1 現在、塾や予備校、家庭教師等を利用していますか、教えてください。
- 2 これまで、塾や予備校、家庭教師等の利用を通じて、あなたの進路意識に影響を与えられた経験があれば、教えてください



## 【巻末資料4：国際バカロレア認定校進路指導担当教員対象インタビューガイド】

### 国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究 質問項目

調査時期：2021年〇月×日

調査場所：オンライン（Zoom）

調査対象者：国際バカロレア（IB）認定校にて進路指導を担当するX先生

調査実施者：菊地かおり（筑波大学）、江幡知佳（筑波大学大学院）

調査目的：本研究の目的は、日本の国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）認定校におけるIB履修生、並びに、日本の／海外の大学に在学しているIB修了生を対象として、彼らがいかなる過程で進路意識を形成してきたかを明らかにすることである。このことを通じて、IB履修生に対する望ましい進学支援の在り方を検討する。

調査時間：約30～40分／1人

質問項目：

#### 1. これまでの経歴について

1 これまでの教員としての経歴や経験年数を教えてください。

#### 2. 御校におけるIB履修生に対する進路指導について

1 御校のIBコースにおける進路指導の方針の概要を教えてください。

2 御校では、IB履修生、およびIBの履修を検討する高校1年生等に対して、いかなる進路指導を行っていますか、教えてください。

- ・ IBの履修を検討する高校1年生等（場合によっては、IBの履修を検討する中学生を含む）
- ・ 高校2年生
- ・ 高校3年生

3 これまでに、御校のIBコースにおいて、進路指導の体制や方法に変更・改善を加えられたことがあれば、教えてください。

4 御校では、IBコースにおいて、どのように進路指導担当教員と各教科担当教員が連携しながら進路指導に当たられていますか、教えてください。

5 御校では、どのような生徒にIBの履修を勧めますか。また、御校では、IBを履修する生徒に対する選抜の基準がありますか、教えてください。

#### 3. 進路指導の課題について

1 これまでに、海外大学進学を希望する生徒に対する進路指導に関して、御校ではどのような課題が生じてきましたか、（また、その課題をどのように乗り越えましたか／乗り越えようとされていますか）教えてください。

2 これまでに、国内大学進学を希望する生徒に対する進路指導に関して、御校ではどのような課題が生じてきましたか、（また、その課題をどのように乗り越えましたか／乗り越えようとされていますか）教えてください。

#### 4. IB履修生の進路選択の阻害要因について

1 以下の項目のうち、IB履修生の進路選択において、阻害要因になっていると考えるものがあれば、「どのように阻害されていると思うか（どのように生徒が困っているか）」を教えてください。

- ・大学進学にともなう授業料や生活費の確保、奨学金制度
- ・入試に関する情報
- ・語学力
- ・IBの科目選択
- ・新型コロナウイルスの影響
- ・その他

**5. IB履修生の進路選択・進路実現に向けた支援や制度改善について**

- 1 IB履修生が希望する進路の実現のために、どのような支援や制度改善（入試制度、奨学金制度など）が必要と考えますか、教えてください。

## 謝辞

本研究の遂行にあたりご協力をいただきました、株式会社トモノカイ、IB 修了生の方々、現時点で調査協力意志を示してくださっている IB 認定校の方々に深く感謝の意を表します。